

「あいさつ運動」がんばっています

6月のある日、中学部の生徒会役員の3人が昇降口に1列に並び、キラキラのテープを貼ったカッコいいタスキを肩に、登校してきた中学部や小学部の友達とあいさつを交わしています。「おはようございまーす！」と、朝から子どもたちの元気な声が昇降口に響きます。

この「あいさつ運動」は、例年小学部から高等部までの児童生徒会役員全員で行っているのですが、今年はコロナ禍により少しでも密を避けるべく、学部ごとに実施しています。

また先日は、小学部1・2年生が道徳であいさつの学習を行った後、登校時の「あいさつ運動」に取り組んでいました。上手にあいさつができれば、たすきやカードにシールを貼ってもらいます。それもうれしそうにしながら、大きな声で、しっかりお辞儀をして、とても立派にあいさつができるようになりました。

毎朝校門付近で、自力で登校してくる生徒たちにあいさつをしていると、元気に「おはようございます」と返してくれる生徒もいますし、声は小さいけど目線を交わしてくれる生徒、伏し目がちにスッと通り過ぎて行く生徒もいて、それぞれのあいさつの姿があります。

子どもたちの様々な姿を見ていると、「あいさつはさせる(させられる)ものではなく、自らするもの」とつくづく感じます。とかくあいさつの指導というと「ほら、〇〇さん、あいさつは？」と声をかけてしまいがちです。下手をすると「もっと大きな声で」とか「相手を見て」とか、不本意な注意を受けてしまうこともあります。子どもはあいさつを求められるたびに緊張したり、ともすれば注意をされたことで「自分は大きい声が出せない」とか「自分から話しかけるのは苦手」といった劣等感につながっていくことにもなりかねません。

正しくあいさつをさせることに気を取られるより、まずは周囲の大人が生き生きとあいさつを交わし、その姿を子どもたちに見せることを意識したいものです。その場の温かな雰囲気、交わす笑顔が子どもたちの心を温め、人とかかわる喜びを実感することにつながります。

最初には、小学部1年生の子どもたちが学んだように、望ましいあいさつの方法を学ぶ必要があります。でも、担任たちが本当に伝えたかったのは、やり方を覚えた後の「あいさつを交わす喜び」でしょう。シールをもらう喜びをきっかけに、ほめられる喜び→やりとりをする楽しさ→自分から元気にあいさつをする喜びを味わうことで、積極的にかかわろうとする意欲＝コミュニケーションの基盤を身に付けてほしいと願ってのもです。

たとえ小さな声であっても、目線を合わせずに足早に通り過ぎても、子どもたちは必ず相手を意識しています。その姿の内には、一人一人異なる形の「おはようございます」の声が必要です。その声をしっかりと聞き取れるようになりたいものです。その声は、その子の思いです。丁寧にその声を受け止め、「おはようございます」に込めたこちらの思いを伝えていく…。そんなあいさつを毎朝子どもたちと交わしていきたいと思っています。